

今週のメニュー

■トピックス

◇テント工連総会全国大会・40周年記念式典に参加して

■随想

◇古代ヤマトの遠景〔番外〕(39)

木下 清隆

■トピックス

◇テント工連総会全国大会・40周年記念式典に参加して

[日本テントシート工業組合連合会](#)(テント工連)は2年ごとに全国大会を開催しており、今年は第3回を迎え、6月22日(土)、北海道札幌市のパークホテルを会場として盛大に催されました。今回は、テント工連の通常総会と共に、設立40周年の記念式典が執り行われました。

テント工連は、帆布製品製造業者の事業活動を通じて業界の活性化を目指し1979年(昭和54)に設立され、今年で40年になります。組合は都道府県毎に1組合の組織形態をとっており、会員数は36組合になり、組合員数は704社に上ります。組合には帆布製品製造・販売業者、帆布生地製造業者などの企業が加盟しています。帆布製品には、ポリエステル等の化学繊維と塩ビ樹脂等の複合材から製造されるテント、シート、オーニング等の製品があります。



挨拶するテント工連泉貞夫理事長

テント工連は業界、地域の活性化、イメージアップを促進するため全国大会を開催し、2015年の第1回大阪大会を皮切りに、2017年の第2回金沢大会に続き、今回第3回が北海道大会です。今回は前回の第2回を上回る参加者数で盛会となり、総会・記念式典の間や展示会場では情報交換している場面が至る所にみられ、組合員の連携が強くなってきている様子が窺えました。

テント工連の主な事業として、①会員増加の為に組織強化、②教育、及び情報の収集・提供活動、③各種ラベル配布事業などがあります。

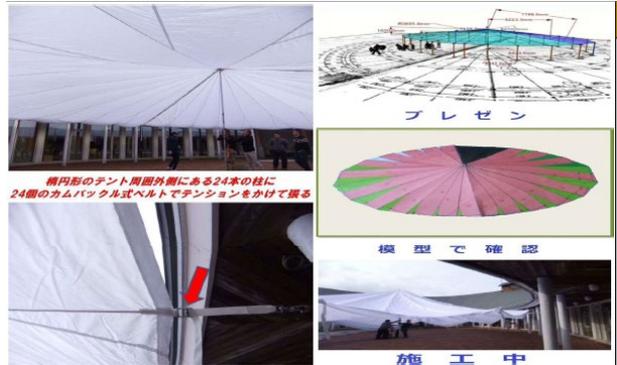
②の関係では、テント工連の下に「青年部会」という組織があり、全国を5つのブロックに分けて、次世代を担う若手が参加して情報共有や勉強会などの活動を行っています。また、「青年部会」は「作品コンテスト」を主催しており、2018年度は第7回の開催になりました(応募期間は2018年11月1日～2019年3月31日、参加資格は青年部会員企業及び青年部準会員企業)。本コンテストは、会員の技能向上、及び青年部会の広報活動の一環として同業各社の作品をコンテスト形式にて募集することにより、テントの可能性及び有効性をテント業界はもとより他業界まで幅広くPRすることを目的としています。今回の受賞作品のパネル展示が本大会の会場内で行われ、大会を盛り上げていました。

次回の大会は2年後の2021年に熊本大会がすでに決まっています。組合の方が連携してさらに盛り上がることを期待しています。

第7回作品コンテスト受賞作品



(1) オーニング・装飾部門
『タコ型テント』佐賀県 (有)川代テント工業



(2) 膜構造・屋形テント部門
『楕円形の中庭テント』北海道 丸富テント工業(株)



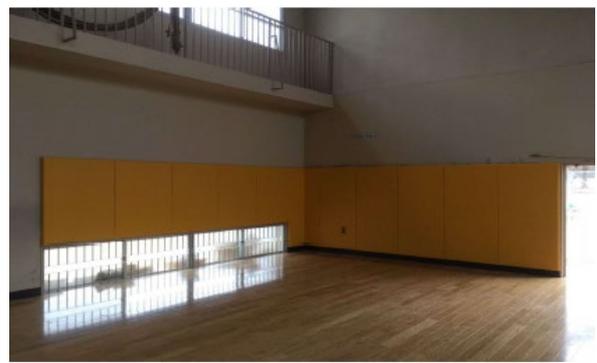
(3) 車輛・船舶部門
『トラックオーニング』京都府 西岡テント



(4) サイン・看板部門
『二子玉川サマーライズ』東京都 (有)三鷹テント



(5) 便利・アイデア部門
『はぎれを使った生地カタログみたいな営業カバン』
愛知県 キャンバスライフ(株)



(6) 防災・アイデア部門
『簡易ベッドにもなっちゃうよ!』広島県
総合テント工業(有)

(7) テントに関するキャッチコピー部門
『人生と暮らしに潤いあたえます テントで得られる快適生活』 静岡県 (株)ハンブ

■ 随想

◇古代ヤマトの遠景〔番外〕(39)

木下 清隆

<前回とのつながり>

博多櫛田神社の祭神女神説問題については、前回論じ、主要説は否定したが、まだ続きが残っており、今回からは、この続きを論じることにする。祭神女神説の発祥の地は、実は佐賀県神埼の「櫛田宮」と想定されることから、先ず、神埼櫛田宮の話から始めることにする。

7 ^{かんざき}神埼の櫛田神社

肥前の神埼はかつて、神埼の御荘があった所である。『古代地名大事典』(角川書店、一九九九)の神埼荘の項には、

[平安期に見える荘園名。肥前国神埼郡のうち。『御堂関白記』長和四年七月十五日条に「神埼御荘司豊島方人參上」とあり、少なくとも長和四年以前に成立していた。神埼荘は『続日本後紀』承和三年十月二十七日条に「肥前国神埼郡空閑地六百九十町、為勅旨田」と見え、この勅旨田を基盤として成立した皇室領荘園と考えられる。…]



神埼 櫛田宮

とある。この中の勅旨田とは、天皇の勅旨により開墾された土地のことである。天長・承和期にこのような開墾が大々的に行われたとされており、神埼荘の前身となったこの地の開墾が承和三年(八三六)に行われたことが記録として残っている。この勅旨田はその後、藤原道長の日記である『御堂関白記』に“神埼御荘”と出てくることから、長和四年(一〇一五)頃には既に皇室の荘園となっていたことが分る。その後、院政時代になるとこの荘園は、院の御領となり“神埼御荘三千町”と称されるまでに拡大される。肥前国では桁外れの広大な荘園であった。この時期、鳥羽上皇の信任の厚かった平忠盛は神埼荘^{あずかりどころ}預所となり、その管理に当たったが、その子清盛も同じく預所となり、併せて大宰府大貳も兼ねていた。このことは先に述べた。この御荘は、承久の乱(一二二一)による公家政権側の全面的な敗北後、幕府によって没収され地頭職が設けられた。その後、文永・弘安の役での勲功賞地として配分されたが、更に南北朝動乱での勲功者に対する恩賞地となり、荘園としての機能を失った。

神埼の櫛田神社は、この御荘の総鎮守であった。従って、現在の社家である^{しぎょう}執行家は、鳥羽上皇時代に勅使として下向してきたほどの長い歴史を持つ由緒ある家系であり、執行武典氏は、第二十七代の宮司である。氏には著書『名も神埼の 櫛田宮誌』(櫛田宮発行、二〇〇一)があり、その内容は博多の櫛田神社に深く係わる所があるので、以下にその主要事項をまとめることにする。なお、神埼の櫛田神社は、現在「櫛田宮」と表記されてい

るところから、以下、引用文を除きこれに従うことにする。()内は筆者注。

A 櫛田宮の創建は、『肥前国風土記』に基づき景行天皇時代とされる。風土記によれば、昔、此の地に荒神がいて人々が多数殺されたが、景行天皇によって鎮められた。この時の荒神が、三所大明神として祀られるようになったことが『櫛田大明神縁起』に記されている。三所大明神とは、櫛田大明神、高志大明神及び白角折大明神である。

(白角折は白角とも書き、これをシラトリと読ませる場合もある。白鳥は日本武尊の別名である。)

B 櫛田宮の主祭神については以下のような諸説がある。

① 櫛稲田姫命説

a 永仁六年(一二九八)の官の宣旨に、「三所大神 所謂 奇稲田姫 高志 白角明神 是也」とあり、当時から、櫛田大神は奇稲田姫と考えられていた。

b 明治十三年、郷社から県社への昇格請願書には、祭神として素戔鳴尊、櫛稲田姫命、足名稚手名稚尊あしなづちてなづちが書いてある。白角折神に替わって足名稚手名稚尊となっているが、この神は記紀によれば櫛稲田姫命の親神である。

c 明治二十八年の記録には、「正面正殿櫛稲田姫命 相殿 左 素戔鳴尊 右 日本武尊」とされており、以降今日まで変わっていない。

② 豊次姫命説

『櫛田大明神縁起』と、本告熊介藤原政景の『櫛田社由緒書き上げ案』に豊次比売命とよつぐひめの名が出ており、中古以来幕末に到るまでの長い間、信じられてきた祭神である。この祭神に対して、筑紫豊氏は昭和四十二年、『櫛田神社祭神考』の中で「次」はスキと読むべきとして、豊鍬入姫命説を提唱した。

③ 大若子命説おおわくご

石井宗因は『神社啓蒙』(寛文七年、一六六七)の中で大若子命を祭神とした。また、佐賀の国学者糸山貞幹も『櫛田神社雑記』(明治四十年)の中で「社伝に曰く 本座 大若子命 相殿 左 高志神社 右 白角折神」と書いている。しかし、この「社伝」がどこからきたのか不明である。

C 弘安四年(一二八一)の元寇のとき、蒙古追討のため託宣により櫛田宮の「御剣」が博多の櫛田神社へ移された。『櫛田大明神縁起』に「…蒙古合戦の最中筑前国志摩郡岐志の海上に、数千万の蛇体浮かび給う。…三ヶ月の後、末社博多櫛田の社壇に疵を蒙る蛇体多く現じ給う。…」とある。永仁三年(一二九五)、この御剣を櫛田宮に返還したが、蛇がこの御剣に巻きついていた。

D 神埼荘は、弘安四年より武家御領となり、正応二年(一二八九)頃、元寇において勲功のあった御家人達へ權益が配分された。

E 『太平記』によれば、元弘三年(一三三三)、菊池入道寂阿が櫛田の宮の前を通り過ぎようとしたところ、馬が前に進むことが出来なくなったので、怒った入道寂阿は社殿に向かって矢を放った。その後、社壇を開いて見たら大蛇が矢に当たって死んでいた、との逸話がある。ここに出てくる「櫛田の宮」は古来、神埼と博多の両方の説があるが、神埼の櫛田宮の説が有力である。

(この話は林羅山の『本朝神社考』(正保二年、一六四五頃)の中にも収録されており、

「寂阿肥後より博多に赴く。櫛田の祠を過ぐ。阿が馬暴癱して行かず。」とあり、この文からだけでは何れかを決め難い。しかし、肥後から博多に行くとした場合、肥前の神埼へは迂回路となり、わざわざ遠回りしてまでなぜ神埼の前を通るのか、との疑問は生じる。この時の寂阿は博多の探題北條英時を討つために出向いている時であり、時間的に余裕が無かったとすれば、博多に直行した可能性はある。そうであれば此処での櫛田宮は博多の櫛田神社ということになる。）

F 昭和二十七年、当櫛田神社の名称を「櫛田宮」と改称したい旨を、神社本庁に申請し許可された。

G 昭和三十九年九月発行の『神埼ニュース』に「神埼が本家、博多は分家」の記事が出る。これは博多の櫛田神社の山笠が重要文化財に指定されるに当たって、神埼の櫛田宮との関係を調査する必要が生じ、その調査過程から生まれてきた認識による。

(つづく)

この「古代ヤマトの遠景」に対し、ご意見・ご感想を頂ければ幸いに存じます。>> [\(筆者\)](#)
「古代ヤマトの遠景」: [バックナンバー](#)

■ 関連リンク

- [メールマガジンバックナンバー](#)
- [メールマガジン登録](#)
- [メールマガジン解除](#)

※本メールマガジン上の文書・画像等の無断使用・転載を禁止します。



■ 東京都中央区新川 1-4-1

■ TEL 03-3297-5601 ■ FAX 03-3297-5783

■ URL <http://www.vec.gr.jp> ■ E-MAIL info@vec.gr.jp